平成３１年４月３０日（火）

老球の細道４７８号

４月の言葉

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

あと何回見れるかわからない鶴ヶ城の桜を今年も見ることができた。高校生の頃は城内を走りながら桜を満喫したものだが、今はベンチに座りながら自動販売機のコーヒーを飲んで、散りゆく桜に自分を置き換えながら感慨深く眺めた。

教員時代の４月は生徒との出会いの季節であったが、退職した今はない。しかし、職業として選んだ「教員」には定年はあるが、生き方として選んだ「バスケットボール」には定年はない。新年度もまた新しいチャレンジとの出会いがやってきますように。

１・テレビから

◆「絶えず波が打ち寄せる岬のようであれ。岬は厳として立ち、水の泡立ちはその周りで眠る」〈ＮＨＫ１００分ｄｅ名著『自省録』マルクス・アウレリウス〉人生は毎日何があるかわからない。いざという時に自分を見失わないで生きることができるよう毎日が勝負である。陸では松のようにありたい。吹け吹け嵐、枝は折れよと根は折れぬ。

２・読書から

◆「他人と比較するな。つねに前日の自分と比較することを忘れるな」〈内田義彦著『社会認識の歩み』岩波新書〉

これは哲学者ルソーの著書『エミール』を貫くモットーだそうだ。まさに少年スポーツの在り方にも応用できる哲学である。ライバルは「なりうる最高の自分」。狭い世界で勝った、負けたと騒がない。他人のことを色々考えている暇などない。

◆「劣った教師よりも、向上心を持った真面目な教師ほど、“がっかり”する体験を持つことが多い」〈ヨーゼフ・レクラ著『スポーツ新時代への道』プレス・ギムナスチカ〉

選手はコーチが思うほど思っていない。この現実に何度がっかりさせられたかわからない。達観しないでもがきながら続ける。いつかコーチが思う以上の選手に出会うために。

３・新聞、雑誌のコラム等から

◆「人生の幕を下ろした時にいただけるよう励みます」〈朝日・イチロー〉

引退したイチローの国民栄誉賞辞退の時のコメントである。今回で３回栄誉賞を辞退している。川柳に「イチロー内カクには手を出さぬ」というのがあった。孫息子はなかなかご飯を食べないので、食べた時には「国民栄養賞」として「トミカ」のオモチャを与える。

◆「世間から忘れられてもいい。そうすれば一から蘇生できるんだから」〈朝日・折々のことば・萩原健一（ショーケン）〉

俳優の仕事は「撮影が終わるごとにリストラ、職探しの連続」と、役を得るために媚をうることなく自らをいつも自由のゼロ地点に置いたという。私のバスケットボールクリニックにも通じる考え方である。常に「この次はない」という緊張感を持って。

◆「モデルさんへのリスペクトは当然でしょう。対象の魅力を引き出して、みなさんにお伝えするという気持ちが必要なんじゃないですか。富士山を撮るときだって“よっ、日本一”と声を掛けてから撮る。」〈朝日・語る・篠山紀信（写真家）〉

「プロフェッショナル」と称される人たちの対象に対する謙虚な気持ちは皆同じ。コーチングも選手の能力を引き出す仕事で同じ。リスペクトはリスペクトで返ってくる。